

「婦人宣教師」登場の背景

ロジスティクスとしての婦人伝道局

前回、小説『母の肖像』(1936年)の主人公、牧師夫人ケアリー(作者パール・バックの母がモデル)に言及したが、そもそも牧師の妻として、あるいは独身の婦人宣教師として海外布教を目指した女性とは、どのような存在であったのだろうか。身近な例としては、明治初期に来日し、とくに近代的女子教育分野で活躍した、多くのアメリカのプロテスタント系婦人宣教師が想起されよう。これまで彼女たちについて、学校史の記述などにおいては、「敬虔な信仰」に基づき「果敢に海を渡り、女学校の設立という偉業をなし遂げた傑出した女性」として説明され、表象されてきた。もちろん「信仰」は決定的に重要な要因であろうが、彼女たちは必ずしも「特別な」女性ではなく、婦人宣教師という一群の女性たちが登場してくるにあたっては、個々人の信仰や資質に還元しきれない、社会的、歴史的、文化的背景というものがたしかにあったと、小檜山ルイは指摘している。以下、小檜山の研究に依拠しながら考察してみよう。

19世紀初めのアメリカによる海外伝道開始の当初から婦人宣教師は存在し、全宣教師のほぼ50%を占めていたという。それは基本的に夫婦を一組として任地に送ったためである。宣教師の妻には按手礼こそなかったが、「準宣教師」として正式に任ぜられた。彼女たちは「主婦として夫の世話をし、子供を育て、家庭内の雑事を処理する」のみならず、現地の言葉を学び、夫の伝道を助けた。現地の人びとを集めるために学校を開設したり、布教の糸口となる現地の女性に接近するための家庭訪問もしたという。とくにアジアでは女性の社会に男性が軽々と近づけないため、婦人宣教師の果たす役割は大きいものであった。

そうして宣教師の妻の仕事の延長線上に独身の婦人宣教師が登場してくる。家庭を預かることが優先される宣教師の妻にとって、多岐にわたる外での伝道は過重な負担となり、伝道に専念できる独身の女性が求められたのであった。とはいえ、異国において家庭で妻や母としてアメリカ的な「クリスチャン・ホーム」を体現すること自体が、異論もあったが「仕事」とみなされ、宣教師の妻にも「給料」が支払われていたことは注目してよいだろう。宣教師の妻による家庭内の仕事は、家事以上の意味、すなわち「クリスチャン・ホーム」とは何たるかを異教徒に示すという広告塔的な意義を持ち、単なるアンペイドワークではなかったのである。

ちなみに1889年の日本における宣教師数(アメリカからの宣教師が圧倒的に多い)は合計527人だが、既婚男性宣教師が166人、独身男性宣教師が34人、独身婦人宣教師が171人であり、これに既婚男性宣教師の妻を加えると、宣教師のおよそ3分の2が女性だったことが分かる。海外伝道への女性の参画はこればかりではない。

一方で、アメリカの一般の女性たちは「献金」を捧げるという形でも、海外伝道に関わってきた。海外伝道開始の当初から、宣教師の旅支度を整えたり、グループを作って、一人あたりでは少額の献金を大勢で行っていたという。これらが拡大発展したのが「婦人伝道局」である。婦人伝道局は、とくに「独身婦人宣教師の派遣」という特定の目的意識をもつものであった。婦人宣教師の旅支度と旅費を整え、給料を支払い、婦人宣教師

のプロジェクトが要する資金を調達し、また婦人宣教師の選定をも独自に行なったという。主な教派の婦人伝道局のほとんどは、南北戦争後の1860年代末から1870年代に設立されている。このようなロジスティクス(兵站)としての婦人伝道局があればこそ、19世紀後半に多くの独身婦人宣教師が誕生し、海外へと旅立つことが可能となったのである。

女性の自己実現の場を求めて

さて、ホーム・ベースで海外伝道を支えた女性による無償奉仕、さらにそれが組織化された「婦人伝道局」と、有給の職業婦人としての「婦人宣教師」とは立場こそ異なるが、いずれも白人の中流階級以上の女性たちであった。この「婦人伝道局」と「婦人宣教師」という両輪の動力をもって、婦人宣教師派遣プロジェクトは推進されていった。このように19世紀において女性たちの伝道活動が活発になった背景には何があるのだろうか。婦人宣教師と婦人伝道局の存在は、通常の海外伝道の理論では説明しきれないと、小檜山は指摘している。たとえば19世紀のアメリカン・ボードの正論では、宣教師の妻はともかく、独身婦人宣教師とそれを支える婦人伝道局とはその存在価値を否定されかねないものであったという。海外伝道事業においては、学校経営、病院開設といった文明伝播的、周辺的な仕事は必要最低限に抑えられ、説教、聖書の翻訳、聖書とパンフレットの配布が再優先の仕事とされた。福音の伝播、現地人の牧師の養成、現地のクリスチャンの手になる教会の設立が海外伝道の方法であり目的とされたのである。しかしこれらの最終的な権威は、按手礼を持つ男性宣教師のみにあった。一方、按手礼を持たない婦人宣教師が最も力を発揮したのが学校(とくに女学校)の設立と運営である。このことは女性に許された領域での最大限の自己実現と捉えることもできよう。

さらに「婦人伝道局」や「婦人宣教師」の登場の背景としては、近代化以降のアメリカの女性たちの社会活動史一般から考察しなければならないが、中でも決定的な転機となったのは、南北戦争の体験である。小檜山がいうように「実に戦争の悲劇は、女性の領域の祝祭でもあった」。とりわけ医療分野での女性の「活躍」は実際的な戦闘補助となった。戦争への貢献を通して「女性の領域を公の領域に拡大する術、組織運営、資金調達、広報宣伝、事務連絡の手腕、そして何よりも自らの自己犠牲が公に認知された」ことからくる自信と充足感を得た女性たちは、やがて戦後の平和において次なる活躍の場を求めていったという。また南北戦争後に教育者、看護師、社会福祉員、医師として、女性に馴染み深い分野が専門職として独立し、それらの専門能力を備えた独身の職業婦人が、婦人宣教師の中心勢力として、海外で活躍することが期待されるようになっていく。単純な比較はできないが、戦前のドイツにおいて看護師や教員といった専門職の女性が知らず知らずのうちにホロコーストに加担していく過程や(ロワー 2016)、国防婦人や愛国婦人として「活躍」した日本の女性たちを思い合わせ、女性の「社会活動」や「活躍(自己実現)」の意義と陥穽には改めて驚嘆せざるを得ない。

[参考文献]

小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』東京大学出版会、1992年。
ウェンディ・ロワー『ヒトラーの娘たち』明石書店、2016年。